滋賀大学経済学部



青木恵哉とともに考える [1)]

――イン・マイ・ライフ(1)――

阿 部 安 成

阿部安成ともうします。いま、リデル、ライト両女史記念館（熊本県熊本市中央区黒髪。以下、記念館、とする）で開かれている特別展示「青木恵哉展―青木がリデルとライトに出会って」（2024 年 4 月 20 日～2025 年 1 月 31 日。以下、青木展、とする）で展示されている「青木恵哉の菊池黎明教会での説教録音テープ（昭和 38 年)」（同展フライヤ裏面）のデジタル化にさいして、わたしが国立療養所大島青松園キリスト教霊交会（香川県高松市庵治町）からちょうだいした奨学寄附金を用いたご縁から、同展のお手伝いをした経緯もあって、この場でお話をする機会を得ました。よろしくお願いいたします。

Ⅰ. ハンセン病史問題のいま――深刻な事態の改善へ

まず、「ハンセン病史問題のいま」を知るために、本 2024 年度に発表された「ハンセン病問題に係る全国的な意識調査」を参照しましょう [2)]。2024 年 4 月 3 日に厚生労働省が発表したそれは、たとえば、その翌 4 日の『朝日新聞』朝刊で「初の全国意識調査」と報道さ

---

1) 本稿は、2024 年 6 月 8 日に開催されたリデル、ライト両女史記念館春季記念祭講演会での講演をもととしてそれに加筆した、2024 年度科学研究費基盤研究（B）（一般）「近代日本の「老い」ゆく場と人びとの生をめぐる歴史研究―療養所と寄せ場から考える」（研究代表者一橋大学大学院社会学研究科石居人也）の成果のひとつである。

2) 同調査報告書（三菱総合研究所ホームページ https://pubpjt.mri.co.jp/pjt_related/hansen_survey/index.html 2024 年 6 月 14 日最終閲覧）についてはいずれまた別稿にて論評する予定。

れました。この調査発表に、国立ハンセン病資料館はじつに素早く反応しました（「ハンセン病問題に係る全国的な意識調査報告を受けて」2024 年 4 月 4 日付、同館ホームページ https://www.nhdm.jp/news/7948/ 2024 年 6 月 2 日最終閲覧）。

同報道によると、「ハンセン病を「知っている」と答えた人は 38%」で、「自身が偏見差別の意識を持っていると思うか尋ねると、35%が「持っていると思う」と答えた。」とのこと。同紙記事からは、ハンセン病について知っているか知らないかと、「偏見差別の意識を持っていると思うか」否かとの相関が明瞭にはわからず、ただし、「ハンセン病に関する学習経験が、元患者や家族への抵抗感を下げることにつながっていない可能性も明らかになった。〔中略――引用者による。以下同〕全ての項目で、学習経験がある人の方が抵抗感を示す割合が高かった。」と示され、また、「報告書では、現在の学習や啓発活動の内容や方法が、抵抗感の低減や誤った言説への認識を是正することに寄与していない可能性がある」との指摘があったと伝えています（なお、記事の見出しは、「ハンセン病「差別意識」なお 35%」と「厚労省ネット調査 学習経験、抵抗感を下げず？」。後者の「？」はなにをあらわすのか？同記事の署名は足立菜摘）。

「学習経験がある人の方が抵抗感を示す」というのでは、ハンセン病史問題の現状はかなり深刻といわざるを得ず、国立ハンセン病資料館はその発表に迅速に対応したのでしょう。

国立ハンセン病資料館とは、その「目的」に「国が実施する普及啓発活動の一環として、患者・元患者とその家族の名誉回復を図るために、ハンセン病問題に関する正しい知識の普及啓発による偏見・差別の解消を目指す。」ことをおき、かつ、5 つあるその「理念」の 1 つを「ハンセン病資料館は、ハンセン病に関する知識の普及や理解の促進に努めます」と掲げ、「求められる資料館像」に「・普及啓発の拠点」「・情報の拠点」「・交流の拠点」をあげ、「機能」として「・教育啓発機能」「・展示機能」「・収集保存機能」「・調査研究機能」「・情報センター機能」「・管理サービス機能」「・企画調整機能」を有すると誇るのですから（同館ホームページ https://www.nhdm.jp/introduction/purpose/ 2024 年 6 月 14 日最終閲覧）、さきの調査結果からは同館の「目的」も「理念」も「機能」も強く疑問視される恐れがあり、だからこそ新聞報道と同日付で意思表明をしたのだともうかがえます。あるいは、そうしたきわめてはやい対応を、厚生労働省から要請されたと推しはかれるかもしれません。

同館ホームページでは、さきにみた新聞報道では曖昧だった相関について、「クロス集計によると、学習や啓発活動を受けた人ほど、元患者や家族に抵抗感を抱いたり、ハンセン病

問題に関する誤った考え方を支持したりする傾向にあるとされています。」と記したうえで、さらに、「報告書は「多面的な検証を早急に行う必要がある」と指摘しています。当国立ハンセン病資料館では、その事業について PDCA 評価方式を導入しているところですが、このような調査結果を真摯に受け止め、より実効性のある普及啓発活動に一層努めていきたいと存じております。」との表明をせまられたのでしょう [3]。

今後、同館がどのように「より実効性のある普及啓発活動に一層努めてい」くのかに注目するとして、他方で、わたしはこの調査結果を、さほど不思議だとはおもいませんでした。いまもわたしは同館へ平均すると月に数回ていどはでかけて史料を閲覧しています。同館で過ごす図書室から入館者入口がみえ、そこそこの数の来館者がいるとわかります。しかし、図書室に来て着席するものはほとんどなく、わたしよりも長く図書室にいるひとをみかける機会がまずありません。年間総数にすると、かなりの数の入館者がいるとおもわれるものの、しかし、そのほとんどが図書室を利用してはいない怖れが高いという実態がうかがえるのです。

また、国立療養所長島愛生園（岡山県瀬戸内市邑久町。以下療養所名を記すさいに、国立療養所、を省く）が実施する「長島愛生園見学クルーズ」の人気は高く、2024 年度のそれも運航日全 6 回（5 月 25 日、6 月 22 日、7 月 6 日、同 20 日、8 月 17 日、9 月 7 日のすべて土曜日）、1 回あたり 80 名の予約がすでに「満席」とのことですし（同園ホームページの「長島愛生園見学クルーズのお知らせ」
http://www.aisei-rekishikan.jp/tour.php#cruise 2024 年 6 月 14 日最終閲覧）、大島青松園（香川県高松市）への見学も、COVID-19 による感染症下よりもまえは、わたしが知るとこ

[3] なお、同館のホームページをみるひとのほとんどが知らないであろう「PDCA 評価方式」とは、たとえば、「沖縄県では、「21 世紀ビジョン基本計画」（平成 24 年 5 学策定、平成 29 年 5 月改定）の着実な推進を図るため、Plan（計画）、Do（実施）、Check（検証）、Action（改善）のいわゆる PDCA サイクルを導入し、毎年度、検証や改善を継続的に行い、この結果を取組に反映させることにより、施策の評価にとどまらず、効果的な推進を図ることとしております。」（沖縄県ホームページの「沖縄県 PDCA の概要」
https://www.pref.okinawa.jp/kensei/shisaku/1014252/1014253/1023439. html 2024 年 6 月 14 日最終閲覧）と記される事業実施とその改善の試みにみられる仕組みで、おもに行政や企業に好まれる取り組みとおもわれる。博物館や資料館（史料館）や図書館に馴染む仕組みかどうか、わたしには判断できないが、立てた「計画」を「実施」したのちに「検証」し必要に応じて「改善」することは、とてもあたりまえにおもえる。わざわざ「導入」をうたうほどのことなのか。

ろでは、学校や官公庁からの見学がひっきりなしという勢いでした。

けして少ないとはいえない数の人びとがこれまでも国立ハンセン病資料館や国立療養所を訪れながら、しかし、わたしたちの社会でさまざまな差別がなかなかなくならず、人権が充分に尊重されない実態をみれば、そうした施設での教え方や学び方に重大な間違いがあるとみなせるので（もちろん、研究者による研究成果の効果や意義も問われる）、だから、わたしにとっては、この「初の全国意識調査」の結果が、深刻であるにもかかわらず、それほど不思議ではなかったのです [4]。国の施設による「普及啓発活動」が十全に機能していないとの危惧を（ハンセン病をめぐる療養所の各園にある社会交流会館などをふくめて）、わたしは以前から感じていました。

くわえて、2005 年に発足したハンセン病市民学会においても、2010 年度の総会と交流集会が「in 瀬戸内」と題されて「長島愛生園・邑久光明園・大島青梅〔ママ〕園」を会場として開催されたときに（2010 年 5 月 8 日、9 日。同学会ホームページの「市民学会について」http://shimingakkai.com/syukaihoukoku-2010.html 2024 年 6 月 14 日最終閲覧）、それ以前に同会の年報において、大島青松園に残る稀有な史料をわたしが紹介していたにもかかわらず [5]、だれひとりその史料を閲覧しなかったことに、すこぶる驚いたことを覚えています。

その大島青松園を会場のひとつとする瀬戸内国際芸術祭においても、そこでの表現や発信にわたしは、問うべきところがあると感じてきました。多用され動員力がある「ツーリズム」が実施され、それがいわば集客力を誇示したとしても、ハンセン病をめぐる学習効果が疑われる実態は隠せません [6]。

---

[4] 本稿のもとである講演を報道した『熊本日日新聞』2024 年 6 月 11 日朝刊記事は「阿部教授は、ハンセン病の認知度が低い傾向にある調査結果にも言及。「深刻な事態だが不思議ではない。史料を確実に残して共有し、活用する術が必要だ」と語った。」と記した（署名は池田美陽）。この「不思議ではない」の言辞を講演よりも詳しく記した。

[5] 阿部安成「史料紹介 長田穂波の痕跡―療養所の生のあらわし方」『ハンセン病市民学会年報 2008』ハンセン病市民学会、2009 年 4 月、同「史料紹介 療養所における「自治」論の始線と史料の現在―大島青松園をフィールドとして」『隔離の百年から共生の明日へ ハンセン病市民学会年報 2009』ハンセン病市民学会、2010 年 3 月。

[6] 阿部安成「解剖台顕現―国立療養所大島青松園と瀬戸内国際芸術祭 2010 と展示作品解剖台」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.140、2010 年 10 月、同「悲しみの根、悲しさのゆくて―瀬戸内国際芸術祭 2010 展示作品解剖台が涙を誘った」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.141、2010 年 12 月、阿部、石居人也「コンクリート塊

では、ハンセン病をめぐる教え方や学び方の間違いとはなにか？――それは、(1) ハンセン病について教えようとするものは、ハンセン病を知ろうとするものの情感と情動にうったえかけるむきがあり、ハンセン病を知ろうとするものもまた、ハンセン病に関心を寄せようとするときにみずからの情感と情動が動かされる期待を持つ嫌いがある、したがって、とことばをつないでよいでしょう、(2) ハンセン病をめぐり教えるものと学ぼうとするものとのあいだで、学理による認知が薄くなったり弱くなったりする傾向があると、わたしはとらえています。そして、(3) 「芸術」の「祭」という感興の場では、ハンセン病についての情報と知識とそれらをふまえた思索が前景において全面展開するはずなのに、しかし、それらが部分として後景に退かされてしまい、余興（アトラクション）であるアートなるものが跋扈している場で人びとは情感と情動とに支配されているのではないでしょうか。

くりかえすと、「学習や啓発活動を受けた人ほど、元患者や家族に抵抗感を抱いたり、ハンセン病問題に関する誤った考え方を支持したりする傾向にあるとされてい」るいま、それを、すぐに、うまいぐあいに改善する妙案はありません。とはいえ、1 つ指摘しておきたい点は、ハンセン病をめぐる歴史性の軽視をあらためることです（くりかえし引用してきたとおり、さきの意識調査は「ハンセン病問題」をめぐってであって、ハンセン病史問題ではない）。ハンセン病には歴史があります。その歴史を知るための手がかりがあります――それらを歴史学研究者は、史料と呼びます。その史料そのものにもまた、歴史があります。こうした、あれこれにかかわる、いくえにも積み重なる歴史を、さきに、ハンセン病をめぐる歴史性とわたしはいいました。

この歴史性を軽んじないために、まず、歴史を知る手がかりである史料を大切にしましょう。そして、史料をふまえた実証と思索の練度を高めてゆきましょう。史料を確実に残し、

の牽引―瀬戸内国際芸術祭 2010 の解剖台展示とハンセン病療養所における死をめぐる生活環境」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第 8 巻第 1 号、2011 年 10 月、阿部「さあ、「解剖台の歴史」について、お勉強しましょう。―瀬戸内国際芸術祭 2010 大島会場の展示作品をめぐる考現学」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.157、2011 年 10 月、同「海きて、しま見て、島知って―療養所の島を会場とする瀬戸内国際芸術祭 2013 観察記録」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.189、2013 年 5 月、同「アート・クリティーク―大島、現代アート、瀬戸内国際芸術祭 2013」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.195、2013 年 6 月、などを参照。ハンセン病をめぐる国立療養所にかかるダークツーリズム批評については、同「展示の刹―ハンセン病をめぐる国立療養所園内施設の現在」『彦根論叢』第 416 号、2018 年 5 月、を参照。

それらを広く共有し、それらを活用する術（すべ）を鍛える必要があります[7]。

ここで、講演の題目についてかんたんに説明しましょう。青木恵哉を考える、ではなく、青木恵哉とともに考える、としました。を、を用いてしまうと、考えるべき対象をもはやたしかなものと固定してしまいかねず、それを怖れ、それを避けて、いまだ考えるべき対象ははっきりとしたかたちをなしていない未知のところが多く、それを知るためには、その考えるべき対象から、その考え方をも学ばなければならない――との構えを籠めて、とともに、の語を用いました。青木恵哉から、その知り方も考え方も教わり学び、そして、青木恵哉を知り、考えてゆく、とのわたしの構えの表現が、とともに、なのです。

では、青木恵哉を知り、考えてゆく、というとき、青木恵哉のなにを、知り、考えてゆくのか。それは、生（せい）です。しかもその生は、ハンセン病者の生というひとくくりのそれではなく、個々の人びとのそれという意味で life よりは lives とあらわせます。さらにあらかじめ述べておくと、青木恵哉を知り、考えてゆくときには、同人だけではなく、青木恵哉と同様の生を生きた人びとをも知り、考えることを目指す、その生は life がよいでしょうか、青木恵哉なるものたちの生ということです[8]。

2.『選ばれた島』の読み方――複数の主題が編み込まれた物語

では、そうした史料の 1 つである『選ばれた島』の読み方についてみてゆきます。

青木恵哉とは、どういう人物ととらえられているでしょうか？ 近時のそれをとりあげると、たとえば、『徳島新聞デジタル版』（2022 年 6 月 15 日 12：00 付）の「とくしま雑学事典」には、青木恵哉の項があり、それは「ハンセン病患者にして、キリスト教伝道者。阿南市出身の青木恵哉（あおき・けいさい、1893 年～1969 年）は、国立療養所沖縄愛楽園（沖縄県名護市済井出）の礎を築いた人物である。愛楽園の一角には頌徳碑（しょうとくひ）や銅像などのモニュメントが立ち、「沖縄救癩（きゅうらい）の先駆者」の遺徳をしのばせる。」と始まります。青木を説くときに用いられる、ハンセン病をめぐる療養所の「礎を築いた」「沖縄救癩（きゅうらい）の先駆者」との定型句が、そこにあります。

---

[7] さきの『熊本日日新聞』記事につけられた「ハンセン病史料 活用を」との見出しは、わたしの講演趣旨を適確にとらえてみせていたといえる。

[8] ここにいう生を、生活としてもよいかとおもう。この「生活」の語は、講演終了時にフロアからコメントを述べたリデル、ノット、ライト顕彰会長の発言から借用した。

この、青木について決まって使われる決まり文句といってよい、とくに前者――「礎を築いた」は、なにに由来するのでしょうか？[9)]

まず、第 1 にあげられる原典は、青木の自伝とみなされるばあいが多い『選ばれた島』（1958 年印刷）です。同書本文は、青木の出生から「国立癩療養所国頭愛楽園が誕生すること」までを記しています。青木がみずからを記したという著作において、その本文末尾が療養所の「誕生」についての記述であるのだから、同書の執筆者である青木が、それを「誕生」させた主体であるというわけです。

ついで第 2 に、青木の逝去時にあらわれた同人の顕彰の仕方をあげられます。たとえば、いま記念館の青木展に出ている『愛楽園ニュース』第 9 号（沖縄愛楽園入園者自治会、1969 年 4 月 1 日）をみると、青木が亡くなって（同年 3 月 6 日）からおよそ 1 か月を経て発刊された同紙面に、「沖縄救癩史に巨歩を遺した 青木恵哉氏逝去」の見出しや「沖縄救らいの先駆者」「愛楽園設立の橋頭保を築く」との文言がみえます。軍事用語である「橋頭保」とは拠点や足場を意味するので、「礎」と同義です。

また、それよりもさきに園外で編集発行された逐次刊行物『聖公会 沖縄伝道教区時報』第 124 号（沖縄伝道教区、1969 年 3 月 20 日）に載る徳田祐弼執事による「沖縄救癩の先駆者／エパフラス青木恵哉執事逝去」（引用文中の／は原文での改行をあらわす。以下同）との見出し記事には、「思えば昭和五年、貧苦の中から土地を買求められた青木先生が、将来愛楽園建設の拠点たらしめんとして此の土地を同志と共に死守して遂に愛楽園創立の礎石となった」と記され、おなじく徳田による記事「エパフラス青木恵哉師の／信仰と事業」には、「一九三九年（昭和〔マ〕十年〔マ〕）十二月二十八日、屋我地大堂原に橋頭保を築く」の文言がみえます[10)]。園の逐次刊行物『愛楽園ニュース』の記事は、園外で編集発行された『聖公会 沖縄伝道教区時報』の追悼号といった観がある紙面を参照して書かれた可能性がありま

9) この「礎を築いた」に類する、「愛楽園は「患者立」療養所だと言われている」との指摘があるも、しかし、その根拠が示されていない（森川恭剛「3. 愛楽園設置運動」ハンセン病問題ネットワーク沖縄編『入門沖縄のハンセン病問題 つくられた壁を越えて』なんよう文庫、2009 年）。

10) 『聖公会 沖縄伝道教区時報』はそれを所蔵する日本聖公会沖縄教区事務所より提供をうけた。ここに感謝を記す。同紙の書誌情報のうち発行所については那覇市歴史博物館ホームページのデジタルミュージアム（http://sivmarketing.xsrv.jp/archives/item4/7521 2024 年 6 月 18 日最終閲覧）を参照した。

す。

そして第 3 に、青木没後の顕彰碑建立にさいしての言辞があります。まず、さきに『徳島新聞デジタル版』にみた「青木恵哉頌徳碑」が、1971 年に沖縄愛楽園内に建てられます。その碑の銘板には、「無抵抗の抵抗を旨とする宗教戦争ともいうべき戦いのドラマをへて屋我地大堂原をかちとった／昭和十三年ここに愛楽園がうまれ」と、「頌（ほ）」めたたえるべき青木の「徳」とはなにであるかが刻まれています。ついで、1976 年には屋我地大橋南岸西側道路脇――沖縄本島（沖縄島）から奥武島へ、そして同島から済井出がある屋我地島へと渡る橋のたもとに、「「のがれの島」の碑」が建てられました。「のがれの島」とは、名護の屋部で焼き打ちにあった青木たちがたどりついた、屋我地島がある羽地内海の無人島であるジャルマ島を指します。それを報せる逐次刊行物『すむいで』の「特集 青木恵哉師の「のがれの島」碑除幕祝賀式挙行」では、「沖縄救癩の先駆者青木恵哉師の「のがれの島」の碑」と記し、青木の「救癩」活動の結実を、「青木師らはこの苦難迫害にも祈りで耐え、遂に大堂原に療養所の橋頭保を築き、沖縄愛楽園の誕生をみたのである。」と讃えたのです（『すむいで』第 27 号、1976 年 7 月 1 日）。

その年 1976 年の 11 月に発行された逐次刊行物『愛楽』第 37 号に掲載された「五十一年度懸賞文芸／随筆／大城立裕先生選」の 3 等「救癩の父青木先生を偲ぶ」（小浜勇執筆）をみると、題目での青木の形容が目をひくとともに、その随筆では「何はともあれ、沖縄のハンセン氏病者の苦しみを広く日本本土の療友たちに知らしめ、政府役人を動かし、愛楽園の創設を見たのは、実に青木氏の功績である。」との青木の事績顕彰もまた目にとまります。

こうした経緯を経て、青木恵哉をめぐるその評価と顕彰と形容として、沖縄での救癩の「先駆者」であり、同地の療養所の基礎を築いたとの言辞が定着してゆきました。青木恵哉像の確立といえます [11]。

---

[11] 福岡安則「国頭愛楽園が“患者立”というのは“創られた伝説”なのではないか」（『解放社会学研究』第 33 号、2019 年）は、「中村〔文哉〕が強調してやまない、青木恵哉が開設に奔走した“愛楽園は患者立の療養所”であるということ」にたいして論難をあびせて、「設立当初から愛楽園を“患者立の療養所”としてみる見方が、全入所者の共通感覚となっていた気配は、まったくない。一九六九年青木恵哉死去。そして、一九七一年、愛楽園発祥の地である大堂原に「頌徳碑」除幕。――この時期に“愛楽園は患者立療養所”との伝説が創られていったのではないか。」ととなえる。これはていねいさに欠ける議論で、「患者立」という点の出典であればすでにみたとおり前掲『入門沖縄のハンセン病問題 つくられた壁を越えて』にさかのぼる必要があり、また、「患者立」という文言

青木恵哉像を広くつくりあげるその端緒であった『選ばれた島』は、しばしば同人の自伝や自叙伝といわれます。たとえば、2014 年に同書の「改訂新版」（佐久川まさみ編、聖公会沖縄教区祈りの家教会発行、いのちのことば社発売、副題「沖縄愛楽園創設者の生涯」）が出版され、その「書評」（『琉球新報デジタル』2014 年 12 月 14 日 11：30 付）に「青木恵哉著〔ママ〕「選ばれた島」〔ママ〕」「青木恵哉自身の手による私家版〔ママ〕「選ばれた島」〔ママ〕」との記載があります[12]。

『選ばれた島』の奥付をみると、「著者」は「青木恵哉」、「発行者」が「W.C.ヘフナー」、「頒布元」として「沖縄聖公会本部」が明記されています。したがって、同書の書誌情報として「青木恵哉著「選ばれた島」」「青木恵哉自身の手による私家版「選ばれた島」」と記して誤りがあるとは、かならずしもいえません。

では、同書は、青木ひとりの「手」によってあらわされたのでしょうか？ これは、同書 1958 年版を手にすれば、だれでもわかるとおり、そうではありません。その「あとがき」に、「あの、憂慮していた原稿は氏によって整備せられ、脱稿するにいたったことは誠に感謝に堪えない。」と明記されているその「氏」とは、その 6 行まえにみえる「宮良保」または「新垣政治」です[13]。『選ばれた島』はその「あとがき」の記述にしたがえば、青木ひ

は 1960 年代末から 1970 年代初にかけて沖縄愛楽園内で編集刊行された著作にはみえない。青木をめぐる言辞をとりあげて、それを「創られた伝説」だと切って捨てるだけではなく、その機能や意味を考えるところに意義があるはずだ。

[12] この書評は、「青木恵哉自身の手による私家版「選ばれた島」の出版が 1958 年」と記すが、厳密にいえば、同書奥付に出版年は記されていない。また、書評子はその 1958 年版と「渡辺信夫の編集による「選ばれた島」」（1972 年版）との異同をあげ、「佐久川は、何よりもこのこと〔「このこと」がなにを指すか不明瞭で推測するほかなく、それは、渡辺の編集によって「失われるもの」を指すとおもわれる〕を大切にした。オリジナルの「選ばれた島」を通して青木に出会った編者は、青木が生きた愛楽園に通い、青木が過ごした部屋にたたずみ、かつ青木を知る人々との交流を深めることによって、青木の傍らにあろうとし続けた。今回刊行された「選ばれた島」は、青木を敬愛してやまない編者にして送り出された珠玉の一冊である。」と佐久川編版を絶賛するが、しかし、同書が「オリジナル」の 1958 年版とも渡辺編の 1972 年版とも異なる、佐久川による「改訂新版」であることにまるでふれず、読者にたいしてきわめて不親切な紹介といわなくてはならない。書評子によって「珠玉の一冊」と讃えられたこの「改訂新版」は「オリジナル」とは異なる版である。

[13] こうした表記についてはひとまず、阿部、石居人也監修、解説『選ばれた島』リプリント ハンセン病療養所シリーズ 1、近現代資料刊行会、2015 年、所収解説「わたり、わたす、書き、つなぐ―青木恵哉という時空」を参照。

とりの「手」によってできあがったのではなく、そうであるかぎり、同書を厳密には自伝や自叙伝とはいいがたいとの躊躇が、わたしにはあります。

また、こうした著述にさいしての協働は、ハンセン病をめぐる療養所ではそうめずらしいようすではありません。たとえば、よく知られた、長島愛生園を生きた明石海人の歌集『白描』（改造社、1939 年）も、明石ひとりの手で書かれたのではありませんし、また、青木恵哉にゆかりのある大島青松園キリスト教霊交会の史誌である土谷勉『癩院創世』（発行人木村武彦、1949 年。なお、国立国会図書館所蔵版は発行所極東学芸通信出版社）も、同園の複数の在園者の手を経てできあがった著作です[14]。もちろんくりかえすと、奥付の記載にしたがえば、『選ばれた島』の著者は青木恵哉にほかなりません。しかしそれをもって、「青木恵哉自身の手による私家版「選ばれた島」」と記してしまうと、「あとがき」もふくめて『選ばれた島』をきちんと読んだことにはならず、『選ばれた島』がつくられたようすを適確につかんだとはいえません。それができあがるにいたるいくつもの「手」を無視し、忘れ去ってしまうことにつながります。

『選ばれた島』とはまた、それを「青木恵哉著「選ばれた島」が描くのは、沖縄のハンセン病者らの受苦と、療養施設の設立に向けて青木ら病者が払った努力の歴史である。」（前掲「書評」。傍点は引用者による）ととらえてしまっては、読み誤りの怖れがあります。なぜならば、そこには、「沖縄のハンセン病者らの受苦」以外のようすも、「療養施設の設立に向けて」だけではない経緯も動向もまた記されているからです。本文最後の見出しが「愛楽園の誕生」である『選ばれた島』は、沖縄におけるハンセン病をめぐる療養所開設譚という面がありながらも、しかしけしてそれにとどまることなく、ハンセン病を病む「私」を軸にしたあれやこれやの叙事にほかならず、それはまた「受苦」にかぎられない青木の女性への思慕の心情や恋心――「嘗ての教え子中原静子さん」への「無性に会いたくてたまらない」気持ちや（27）[15]、「ある婦人に対する特別な愛情」（34）、をも書きつらね、日々の生活の場での刻苦にむきあった生活誌なのです。しかも、それが本というかたちをとるまでには、ま

---

[14] 『白描』については、村井紀「明石海人の“闘争”」明石海人著、村井紀編『明石海人歌集』岩波書店、2012 年を、『癩院創世』については、阿部安成「転成と創世」同監修、解説『霊交』リプリント国立療養所大島青松園史料シリーズ 3 別冊、近現代資料刊行会、2014 年を、参照。

[15] 『選ばれた島』からの引用にさいしては、読者の便をふまえて頁数を引用文のあとに（59）のとおり記す。原典は 1958 年印刷版とする。

さにいくにんもの「手」や目を経たのですから、『選ばれた島』という図書は複数の病友による協働の産物だったのです。それは、ハンセン病を病みながらも生きることをやめなかったいくにんもの人びとの声が織りなす、複数の主題が編み込まれた物語なのです。

そうした『選ばれた島』という著述を簡潔にあらわし簡便にみられるようにするために、その内容を取捨選択し凝縮して、その場を訪ねるだれの目にもみえるようにつくりあげられたかたちが、さきにみた「青木恵哉頌徳碑」です。青木恵哉の像（イメージ）は、記念碑というかたちをとることによって、同人を知ろうとする人びとのあいだに、よりいっそう広く、着実に、定着していったことでしょう。

3. 青木恵哉の生をめぐる環境をみすえる

つぎに、青木恵哉を知り考えるときのわたしの観点を示します。それが環境です。この環境とは、「四囲の外界。周囲の事物。」であり、辞書にいう「特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界。」（『広辞苑』第 6 版）の謂です。知ろうとする、考えようとする、そして形容し、表現し、造形しようとする対象がいるとき、それがあるとき、その環境はなにか、それもきちんとふまえて対象をかたちづくろうとする構えです。

この環境について述べるまえに、ふたつの参照項にふれましょう。

ひとつは、菊池恵楓園歴史資料館の展示です。同館ホームページの「歴史資料館のあゆみ」（https://www.keifuen-history-museum.jp/history.html 2024 年 6 月 17 日最終閲覧）によると、同園では 2006 年 12 月に「旧事務本館を改修、「社会交流会館」という名称の資料館としてオープン。」に始まり、2012 年には「社会交流会館運営委員会において社会交流会館の展示替えを行うことが決定。〔中略〕運営規程の見直し、展示替えの実施などを行」い、2013 年 5 月に「社会交流会館リニューアルオープン。」。さらに 2015 年に「恵楓園入所者自治会の要望を受け、園が「新社会交流会館整備検討委員会」を設置。／本格的な資料館の設置に向けてリニューアル事業が開始され」、2017 年には「恵楓園入所者自治会が株式会社乃村工藝社と「展示基本計画書」作成のための契約締結。／展示業者を用いた高い技術水準での展示計画が策定される。」。そして 2022 年になって「リニューアル式典開催。／社会交流会館が「恵楓園歴史資料館」と改称される。」にいたったとのこと。「当初は療養所に付属する「資料展示場」のような施設でしたが、館事業の伸展、リニューアルの実施を受けて、

現在では地域における人権教育の拠点、ハンセン病問題の調査研究施設としての地位の確立を目指す段階となっています。」（これは、いつそうした「目指す段階となってい」るというのか不明。つねに「拠点」や「地位」の「確立を目指す段階」なのか？ いったいいつ「確立」するのか？）との説明があります。

展示室に入るとまず、「かつて恵楓園を囲んでいた「隔離の壁」に向かって投影され」る「ガイダンス映像上映」があります（同館ホームページ「ハンセン病問題、入所者の人生を伝える」https://www.keifuen-history-museum.jp/exhibition-room.html 同前）――「本館展示室の最初にガイダンス映像の上映場所をご用意しております。見学される方は始めにここでガイダンス映像をご試聴ください。上映時間は 10 分程度となっています。ガイダンス映像は以下の 2 種類をご用意しております。」との映像は、「私たちが歩んできた道（11 分）」「繰り返された過ち（13 分）」とのこと [16]。

同館の展示室では、「展示業者を用いた高い技術水準での展示計画が策定される。」と誇るだけあって、まばゆいばかりにきらびやかな展示がくりひろげられています。そうした展示を観覧する前提として設けられているガイダンス映像 2 種類の内容のうちで、前者について気になる点をとらえておきましょう [17]。

ガイダンス映像「私たちが歩んできた道（11 分）」は、ナレーションにおいて [18]、療養所におけるハンセン病者たちは、「とじこめられていた」（閉じ込められていた）のだと示し、そこはまた「ちりょう」（治療）するところではなく「つかまえておくばしょ」（捕まえておく場所）であり、「りょうようしょ」（療養所）というよりも「まるでしゅうようしょ」（まるで収容所）にほかならず、「とっこうやくがなかったじだい、しゃかいからかんじゃをなくすもっともかんたんなほうほうは、かんじゃをしぬまでりょうようしょからださないことだった」（特効薬がなかった時代、社会から患者をなくすもっとも簡単な方法は、患者を

[16] 2024 年 6 月 9 日の同館展示観覧時に同館スタッフよりこれら「ガイダンス映像」は同館ホームページからダウンロードできるとの教示を得た。ただし同館ホームページの「HOME」「ハンセン病とは」「歴史資料館について」「歴史資料館の役割」「その他・お問い合わせ」のページのいずれにも当該箇所はなく、あらためて同館に尋ねたところ、「見学予約」にある「ガイダンス映像のダウンロード配信依頼はこちらから」をクリックして申請しなければならないとわかった。観覧時の教示に申請の指示はなかった。

[17] 同館の展示についてはまたべつに批評する予定。

[18] 同映像ナレーションの引用にさいして、まどろっこしいだろうけれども、まずは音（おん）としてどう聴こえるかを記したのちに漢字をあてた表記を載せる。

死ぬまで療養所から出さないことだった）と示します――「わたしたちにとってこのせいまいりょうようしょのなかだけがせかいのすべて」（わたしたちにとって、この狭い療養所のなかだけが世界のすべて）という主張がナレーションをとおして映像を観るもの聴くものにうったえられます。

そうした境遇において、「かべのなか」（壁のなか）で「じんせいのいみ」（人生の意味）を「ずっとかんがえ」（ずっと考え）てきて、「いきついたこたえ」（いきついた答え）が「ひととしゃかいとつながること」（ひとと社会とつながること）だと、ナレーションをとおして語られます。

その手立てが、「えんげき、ぶんげい、うんどうかいなどいろいろなぶんかかつどう」（演劇、文芸、運動会などいろいろな文化活動）で、この活動をとおして、「となりにいたしらないだれかが、かけがえのないなかまにかわり〔中略〕やがてなかまがあつまって〔中略〕じちかいにな」（隣にいた知らないだれかが、かけがえのない仲間にかわり、やがて仲間が集まって自治会にな）ったとの進化が、ナレーションでたどられます。

これは、ハンセン病史をめぐる 1 つの典型の認識をあらわしています。それは、伝染病としてのハンセン病への予防法にもとづく対策は、特効薬がない時代においては病者の「治療」ではなく「収容」にほかならず、そうしたなかで、ひとと社会と「つながること」を「文化活動」をとおして実施してきた、というハンセン病史をめぐる認識です。たしかにそこは、病者を死ぬまで出さないというよりも、火葬場や納骨堂があったそこは、死んでも出られなかった「収容」施設という面がありました。しかし、そこは、すべての在園者にとって、その全生涯をとおしてつねに、「世界のすべて」だったのでしょうか？ わたしには、「壁」に囲まれていたとはいえ、かつ、そこが厳峻な「収容」施設だったとはいえ、療養所が在園者にとって「世界のすべて」だったといってしまうところには、強い違和があります。

2 つのガイダンス映像のナレーションは、その主語が「わたし」「わたしたち」です。この主語にかかるいわば文法は、2 つのガイダンス映像のナレーションにとどまらず、展示全般におよんでいそうです[19]。したがって、なによりハンセン病者そのひとの、当事者によ

[19] 「「菊池恵楓園」新資料館オープン 展示内容主語は「私たち」」『毎日新聞』2022 年 5 月 14 日朝刊熊本地方版（なおこの記事は、毎日新聞記事データベース毎索でその全文を閲覧できないし、同地方版は国立国会図書館での所蔵もなく、本学附属図書館をとおして文献複写依頼をしたところ該当館において公費扱いができなかったため、わたしは記事見

る認識だというのでしょう。では、展示室にところ狭しとならべられたり配されたりした絵画や短歌は、いったい療養所を生きた人びとのなにだと、なにのあらわれだと、いうのでしょうか？ それら「文化活動」がひととひととを結び、みずからを、みずからで治めるにいたり、また、壁のなかでの「人生の意味」が「ひとと社会とつながること」だったと示すのであれば、療養所を生きる人びとにとっての「世界」とは、予防法体制をこえたひろがりと深さとをもつ生きる場だととらえてよいのではないでしょうか。療養者が生きた「世界」は、その心身のすべてにおいてつねに、「壁のなか」にはとどまっていなかったはずです [20]。

もうひとつの参照項が、2014 年に劇場公開されたドキュメンタリ映画『かづゑ的』（監督熊谷博子、製作配給オフィス熊谷）です。わたしはハンセン病についての劇場公開ドキュメンタリ映画やテレビ・ドキュメンタリのすべてを把握してはいないものの、在園者の名を題目としたそれはあまりなかったとおもいます。ジャン・ユンカーマンの「アイディア」だというその英訳である「Being Kazue」の案出は上手 [21]。映像をみるまえにウェブで読める「コメント」も賞賛に満ちていました [22]。映像をみると、かづゑさんのひとがらや立ち居振る舞いやそのことばの数々に魅かれてゆきます。

でも、この映像はかづゑさんを、独り法師にしてしまったのではないでしょうか。この映画のホームページのトップページ（https://www.beingkazue.com/ 最終閲覧 2024 年 6 月 17 日）も、フライヤも、かづゑさんと孝行さんがふたり写る写真が配されています。ドキュメンタリ映像では、撮影中に亡くなった孝行さんの遺骨が入った骨壺を抱えるかづゑさん、母親の墓石を抱いてお母さんと呼ぶかづゑさん、そうするかづゑさんを支える園内外の

出ししか閲覧できていない）。

[20] ドキュメンタリ映画『61ha―絆』（監督野沢和之、製作配給インタナショナル映画、2012 年劇場公開）は、大島青松園を生きるひと組の夫婦をとりあげるも、ふたりをその心身において同園がある大島の面積「61ha」に閉じ込めてしまったとわたしは観た（阿部安成「わたしの知らないあのひとの姿―ドキュメンタリ・フィルム『61a 絆』批評」Working Paper Series No.184、滋賀大学経済学部、2013 年 1 月、を参照）。

[21] オフィス熊谷＋きろくびと編『映画『かづゑ的』公式パンフレット』オフィス熊谷、2024 年。とはいえ「かづゑ的」の「的」にわたしはひっかかってしまう。この映像についてもべつに批評する予定。

[22] 「かずえ的」ホームページ https://www.beingkazue.com/comment 2024 年 6 月 17 日最終閲覧。この「コメント」は前掲『映画『かづゑ的』公式パンフレット』でも読める。なおそこに寄稿した「作曲家」や「ドキュメンタリー監督」など 19 名にひとりも歴史家がいない点が気になった。もちろん歴史家がかならず必要だとはいわないが。

人びと――かづゑさんはだれかといる、かづゑさんのほかにはだれもいない場面も映し出されますが（それでもその場に撮影スタッフがいる）、かづゑさんは、でも、だれかといるのです。だから、この映像を名づけるのであれば、それは「Being Kazue」もよいが、ほんとうは、Being With Kazue ではなかったのでしょうか？ かづゑとしてある、かづゑである――それはまた、かづゑとともにあるだれか、かづゑといっしょのだれか、がいるからこその、Being Kazue なのでしょう。

この映像をとおして Being With Kazue というハンセン病をめぐる療養所を生きる人びとがあらわされたにもかかわらず、その名づけにさいしてそのドキュメンタリに映しだされる像としての Kazue をいわば死産させてしまったと、わたしは感じてなりません。伝染病だから隔離されたハンセン病者を、この映像はけしてひとりではない療養所在園者として撮ったのに、ところがその名づけにおいて、そのひとを独り法師にしてしまったのです（さきに脚注 20 でふれたドキュメンタリ映画『61a』もまた、被写体をふたりだけにしてしまった嫌いがある）。

Being Kazue の名づけ親といい得るジャン・ユンカーマンは、「英語版制作」としてこの映像にかかわったと示されています。「長らく仮タイトルを『わたしの長い道』としていたが、英語字幕版の翻訳をお願いしたジャン・ユンカーマンさんのアイディアで、『かづゑ的』（Being Kazue）と決まる。」（前掲『映画『かづゑ的』公式パンフレット』）というのならば、まちがいなく、映画の題目は「わたしの長い道」よりも「かづゑ的」のほうが人目をひくでしょうが、それでも、「的」という曖昧語を避けて、よりいっそう映像にみあった題目としたほうがよかったでしょう。

くりかえせば、ハンセン病が伝染病であるがゆえに、それに罹った病者を収容する療養所は隔絶の場だととらえられ、そこにいるひともまた隔離されたものとして、しばしば、意識するとしないとにかかわらず、当事者であるか非当事者であるかを問わず、そう表現されてしまうのです[23]。けれども、ハンセン病をめぐる療養所では、たったひとりだけで生きてゆくことはむつかしかったでしょうし、在園者のすべてとはいわないものの、そのなかのい

[23] 「閉ざされた島の昭和史」「隔絶の里程」という当事者による史誌の書名を想起せよ（大島青松園入園者自治会編『閉ざされた島の昭和史―国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』大島青松園入園者自治会、1981 年、長島愛生園入園者自治会編『隔絶の里程―長島愛生園入園者五十年史』日本文教出版、1982 年）。

くにんかは、けして、閉ざされ切った場所で、自分以外の人びとから隔て離されたその果てで生き暮らしたわけではありません。ことに、絵画であれ詩歌や散文であれ、そうした造物(もの)をこしらえた在園者たちは、そのこころのなかにおいて、大いなる飛翔をし得たといっても、当事者からひどく怒られはしないでしょう。もとより、ハンセン病をめぐる療養所に入ることによって喪ったものも、入らなければ得られたはずのものも、厖大にありはするのですが。

青木恵哉もまた、あちらこちらで、だれかとともに、だれかといっしょにいました。さきにみたとおり、それは、なにより『選ばれた島』という造物(もの) そのものがあらわしています。同書には、① 1958 年版があり、その版には前記のとおり①´「あとがき」において黒く塗りつぶされ人名のその脇にスタンプが押されるとの加工された冊子があり、ついで② 1972 年版があり、その版の表紙はカラー刷りと、②´色褪せたのかもともとの装幀なのか不明な白黒刷りとがあり、③ 2014 年の「改訂新版」、④ 2015 年の「リプリント版」のつごう 6 様があります（このうち記念館の青木展では、②以外が展示されています。1958 年版の展示が①か①´かは未確認)。

また、青木恵哉の署名がある 1958 年版を 2 冊、わたしは確認しています（ほかにもある可能性あり)。1 冊が、これも記念館の青木展に展示されている秋山 禮範(みつのり) 司祭宛ての献本、もう 1 冊が国立ハンセン病資料館図書室にある林芳信医師宛てのそれです。図書に記された手書きの署名は、まさに青木恵哉が生きた痕跡にほかなりません。

上記『選ばれた島』の②以降はすべて、青木と面識のないものがつくりました。とはいえ、それもまたひとのつながりのあらわれといえます。どういう理由であろうとそれぞれに必要があり、青木がもはやいない世にむけて『選ばれた島』を送りだしたのです。

さかのぼれば、青木にとっても、協働の作業を経て世に文字を放つことは経験済みでした。同人が初めて入った療養所で結ばれたキリスト教信徒団体の霊交会は、その機関紙『霊交』をまずは手書きでつくり、ついで謄写版刷り（ガリ版刷り）で、やがて活版印刷へと展開してゆきます。その機関紙づくりを最初に担った在園者のひとりが青木恵哉でした。

喩えると、療養所におけるそうした協働の果実として、青木恵哉を著者とする『選ばれた島』も、明石海人『白描』も、土谷勉『癩院創世』、キリスト教霊交会の『霊交』もあったのです。そして推察をふくらませれば、ハンセン病療養所では、なにであれ、なにかをつくるときには、協働という作業が欠かせなかったのではないでしょうか。（もちろん、いわゆる患者作業が在園者の心身を損なったという事実があります）

青木恵哉はまた、よく歩いたハンセン病者でした。どちらかというと軽かったといえる症状が功を奏したのでしょう。ときに自転車に乗り、ときにくり舟を操って、あちらこちらへと移り動いた青木ゆえに、そのゆかりある 造物(もの) がいくつもの療養所に残っているのです。

時期でいえば、第二次世界大戦後にそれからしばらくして、世上も園内もどうにかこうにか落ち着きを得たであろうところで、青木は少なくとも二度、いわば里帰りをしています。そのときの手紙や写真や記録がいま、香川県の大島青松園キリスト教霊交会教会堂に、沖縄県の沖縄愛楽園交流会館と日本聖公会沖縄教区事務所に、熊本県の記念館と菊池恵楓園歴史資料館に、残っています。

大島青松園には、「青木先生一周忌」などの裏書きがある沖縄でのその法要を撮った写真や、里帰りした大島の西海岸で在住信徒 3 名とともに青木が写っている裏書きのない 1 葉があります[24]。沖縄愛楽園には、大島にある里帰りときの青木が写る写真と組みとなる数葉があります。熊本のさきの 2 館にもまた、里帰りのときに青木が菊池恵楓園黎明教会でつとめた説教の場を撮った写真があり、しかも記念館には、その説教を録音したオープンリールテープが残っていました。その説教の写真 2 種 3 葉とテープの現物が記念館の青木展で展示されていて、説教の音声を聞くこともできます[25]。

このテープもまた、青木の渡航を準備しそれを可能としたもの、菊池恵楓園黎明教会での説教を準備しそれを実施したもの、その説教を録音し、さらに保存しつづけたものたちがいたからこそ、いまに残りました。それほどに多くのひとの手を経た記録だといえます。そうした人びとの手がかかわったテープの音声を聞くと、70 歳台にしては張りがあり力強く聞こえる青木の声が蘇ります。

日本聖公会沖縄教区事務所に残る逐次刊行物『沖縄聖公会時報』の 1973 年刊行分の第 89 号から第 93 号までに（第 91 号をのぞく）、「私の今浦島記」と題された青木執筆の旅行記が掲載されています。

---

[24] 大島青松園のキリスト教霊交会教会堂にある写真については、前掲「わたり、わたす、書き、つなぐ」と、阿部安成「きりとる―国立療養所大島青松園キリスト教霊交会の写真」『滋賀大学経済学部研究年報』第 24 巻、2017 年、を参照。

[25] その説教の全文は、『バラとすみれ』第 55 号、リデル、ノット、ライト両女史顕彰会、2024 年 6 月、に掲載されている（リデル、ライト両女史記念館長秋山大路による文字起こし、2024 年 4 月 11 日付）。それとはべつにわたしもこのテープについての稿を発表する予定。

この『沖縄聖公会時報』にしても、さきに青木追悼号にふれた『聖公会 沖縄伝道教区時報』にしても、それらが日本聖公会沖縄教区事務所で保管されていても少しの不思議もありませんが、じつはそれらのうちのいくつかが大島青松園キリスト教霊交会教会堂図書室にもあります[26)]。造物(もの)が送り送られるには、それを為すひとの意思があります。その意思は、ひととひととのつながりのあらわれです。そのつながりは、療養所の塀も海も主権境界をも越えて造物(もの)の移動を実現させたのです。送り送られた造物(もの)をのちにいたるまで保存してきたり保存できる環境を整えたりしてきたひとたちがいたから、その造物(もの)によって、その造物(もの)をとおして、かつてのひととひととのつながりをわたしたちは知ることができます。

記念館長がその父の司祭から受け継いだ簿冊（表紙に「救癩伝道」と記されたそれが、記念館青木展で展示されている）に綴じられた手紙や沖縄愛楽園の祈の家教会にあった手紙（いまは沖縄愛楽園交流会館所蔵）は、よりいっそう、ひとの意思が籠った、ひととひとのつながりをあらわす造物(もの)ととらえられるでしょう。里帰りをめぐって、青木はいくつもの手紙を送り送られていました。写真にもまた、それを撮るもの、送るもの、受けとって保存しておくものたちの意思が籠っています。

ここで、環境という観点をおくことにより、なにを考えるのかをまとめましょう。ひとは生き暮らすなかでさまざま造物(もの)を手にしたりつくったりして、そのいくつかをわが身のまわりにおき、ときにそれをひとに送ったり、ときにひとから送られたりしたそれをまたわが身の周囲に配してゆきます。そうした日常の生活の場にある営みは、ハンセン病をめぐる療養所内であろうと、在園者が呼ぶところのその外にある「社会」においても、さほどおおきな違いはないでしょう。ただし、いわば職住の場が、ハンセン病をめぐる療養所内では、その外よりもいっそう接近しているといえるかもしれません。それでも、さまざまな、いくつもの造物(もの)を介してそこにあるひととひととのつながりは、ひとまずは限られた空間といえる療養所内にとどまってはいません。療養所内をどのくらいのていど限られた空間とするかは、そこを当事者がどう生きるか、生きたかにかかわり、また、その生をわたしたちがどうみるのか考えるのかにかかわってくるでしょう。

その点では、青木恵哉という療養所在住者は、3 か所の療養所――香川県の大島、熊本県

26) 石居人也による調査報告が前掲「わたり、わたす、書き、つなぐ」にある。こうした沖縄からの逐次刊行物寄贈に石居は「青木の意思」をみている。

の黒髪、沖縄県の済井出、を生きたのですから、ひとまずは、稀有なハンセン病者だったといえます。そうした生をとおして青木は、豊富な痕跡を残しました。青木の生は、いくつもの軌跡の重なりだといえます。青木は沖縄のそれぞれの活動の場において、信仰と修養と衣食住とを整えてきました。信仰を軸として青木は伝道や布教のために移動し、拠点を得てはそこで修養につながる生活改善を実践し、その根底に整った生計を、暮らしを、据えるべく心身を動かしました。青木にとっての「救癩」とは、一方通行の庇護や掩護ではなく、病者たちがともに暮らしむきを整えるところにその主眼がありました。

そうした青木の軌跡はまた、それまでのいくつもの場での経験との連なりでもありました。大島と熊本での信仰の交わり、そして熊本での規律と禁欲の生活、大島でも青木が去ったのちに霊交会を媒介として園外の修養団の実践が導入されてゆきます。克己の生活規範とでもいうべき姿勢を、青木はとります。それはまた、青木がそれぞれの暮らしの場で身につけた心身制御の技法であり、それぞれの暮らしの場で病友たちとともに生の基軸とした姿勢でした。信仰一辺倒ではうまくゆかない、修養だけを説いてもむつかしい、日々の暮らしを絶やさずにつぎの日へとまた送ってゆくその継ぎ目に、いわば鋼(はがね)の鎹(かすがい)として信仰と修養を打ち込んだのだといいましょう。

日々の暮らしのなかで、青木はまた、思索をとめず、それを書きとめてきました。ときにそれは機関紙に掲載され、ときにはまた手紙という様式で知己に送られました。それらがいくつもの青木の場所に残り、いまもそれをみることができます。同一の造物(もの)、組みとなる造物(もの)、かつてはそれぞれの場のどちらにもあったであろうにもかかわらず、いまは一方の場にしか残っていない造物(もの)――それらは青木というハンセン病をめぐる療養所の在園者がいて、そのひとは場を移して動き、複数の領野――信仰と修養と暮らしを生きた、その痕跡であり、おなじ時代、おなじ時間にべつの場を生きたその証なのです。

4. 青木恵哉とはなにものだったのか？と考えるのか

青木恵哉とはどういう人物だったのか？という問いと、青木恵哉とはどういう人物だったのかをどのように考えるのか？という設問とを区別する、それがこの第 4 の題目（青木恵哉とはなにものだったのか？と考えるのか）に籠めた意図です。

青木というと、その表現や形容の定型として示される、ハンセン病をめぐる療養所の礎を築いた、沖縄救癩の先駆者といったところで、ではそうした青木像を描くものたちは、青木

のなにを知っているというのでしょうか？

わたし自身の不明を恥じつつ明かすと、青木の愛唱歌が聖歌 462 番だと、つい最近になって知りました（2024 年 5 月 9 日日本聖公会沖縄教区事務所発 E メール）。こうした情報提供もまた、青木を軸としてつながったわたしと同事務所とのあいだがらの賜です。ただし、同人の愛唱歌は 1 つではなかったようです。さきにふれた「青木恵哉頌徳碑」の除幕式で、「青木先生の愛唱歌四六五番の「めぐみふかき」を合唱して開式、碑の除幕をして拍手」との記事（「沖縄救らいの先駆者、青木師の碑建つ」）に、これもまた最近になって接しました。その記事が載る『らい園教会新聞』（第 35 号、好善社、1972 年 1 月 20 日）を、恥の上塗りを示すと、わたしはこれまで知りませんでした。同紙を知るきっかけは、記念館での展示準備と史料閲覧にさいして許された、同館長の父秋山禮範（ろつのり）司祭の礼拝ノートというべき冊子の閲覧にありました。ノートを手にとるなかで、同紙が挟みこまれていると知りました（ただし、上記同紙第 35 号はない）。これまでまるで知らなかった同紙の所蔵機関を探すと、国立ハンセン病資料館図書室にあるとわかりました[27]。同紙をわたしが手にし得たのも、記念館とのあいだがらゆえといえるでしょう。

この『ライ園教会新聞』には、青木の寄稿を 1 つだけ確認しています（「沖縄通信／愛楽園教会の現況／青木恵哉から／石原信祐兄（学舎）へ」同紙第 2 号、1963 年 2 月 13 日。紙名は標記のまま）。青木恵哉にかかる 造物（もの） とはいまも、あらたないわば出会いがあります。そうしためぐりあわせも、ひととひととのつながりゆえなのです。

そしていそぎつけくわえると、愛唱歌がわかったからといってそれは些末な情報にすぎないとかたづけてはいけません。沖縄愛楽園祈りの家教会では、『愛楽園祈りの家教会―献堂 70 年記念誌』（愛楽園祈りの家教会、2023 年）の作成過程で設けた信徒の座談会において、青木と親しくしていたようすを初めて聴けた信徒がいたとのこと。同人はあらためて、「青木先生の愛唱歌〔聖歌 462 番〕だったと嬉しそうに話し、楽譜を持ち帰られました。」

---

[27] 同紙は国立国会図書館にも所蔵がなく、CiNii での検索でもみつからず（2024 年 6 月 30 日最終検索）、国立ハンセン病資料館図書室にあるとわかった。同室所蔵は複写物製本版であり、その原本の所蔵元を尋ねたところ、わからない、ただし、同紙を複写した時期に、同紙発行所である好善社（東京都目黒区）が所蔵する諸史料を複写しているので同社が原本所蔵元かとの教示を同室スタッフから得た（2024 年 6 月 25 日）。だが、好善社で複写した諸史料の情報がありながら、同紙のみの複写事情が不明あれば、好善社所蔵の同紙を複写したかも不明瞭のはずで、よくわからない説明だった。

といいます（前掲日本聖公会沖縄教区事務所発 E メール）。

なにを愛唱歌としていたかを知るとは、たんにありさまやおもむきを報せられたというにとどまらず、それはいわば、ひとの こころ（情） にそれ相応の 返しをする（報） ことであり、青木と親しくしていた信徒は、青木への敬慕を、青木について語ったいま、その楽譜を持ち帰るという動作によってあらわしたといえるのです。

青木を知るものは、少し硬いいい方をすると、同人との邂逅や対面の場を選ぶときがあります。記念館での青木展の準備の一環として、2024 年 3 月 10 日に沖縄愛楽園を訪ねたさいに、祈りの家教会司祭から同教会納骨堂に入ることの許しを得ました。わたしたち 3 名（記念館長、一橋大学教授石居人也）はみな初めて納骨堂に入り、そこに青木恵哉の骨壺があると知りました（そこにはまた大城平永の墓碑もあった。それについてはべつに記す）。そのときの館長のひとこと――「やっとお会いできました」は、『選ばれた島』を読み、録音された青木の説教を聴き、青木展の準備をしている館長にとっても、青木の遺骨がある納骨堂をようやく対面の場として確定し得たということなのでしょう。館長には、納骨堂こそが青木にめぐり逢う場所だったのだといってもよいでしょう。ここには、著書や写真や手紙だけではないめぐり逢いの場の設け方やとらえ方があらわれています[28]。

遺骨や骨壺と対面しても、それとの対話は不可能だ、と切って捨てられはしないものの、やはりそれにはむつかしさがつきまといます。では、亡くなるまえの面談や対話はどうでしょうか[29]。事故や病気ではなくおおよそ天寿をまっとうできるばあいには、その死のまえに老いがあります。老いを生きる青木恵哉について、つぎの記述があります――「晩年の著者は園内では疎外された老人であり、かれを重んじる人は数人しかいなくなった。戦後、本土に渡ったとき、本土療養所で示された手厚いもてなしと尊敬を思うにつけ、愛楽園におけ

---

[28] 青木が洗礼をうけた大島青松園キリスト教霊交会の創設信徒のひとりである三宅官之治をめぐって、同会では教会堂図書室にその肖像写真を掲げ、教会堂まえには碑を建てて同人への敬慕をあらわし遺徳や偉業を顕彰するも、同人の故郷に墓碑がある意味は大きく、同会にとって初めての園外礼拝が、そのいわば発見を経て墓前でとりおこなわれた（阿部、石居人也「父母に抱かれた「聖者」のひと―国立療養所大島青松園在住者の顕彰」Working Paper Series No.208、2014 年 3 月、同「あれからずっと、あれから、ずっと―国立療養所大島青松園在住者の顕彰碑をめぐるその後」同前 No.211、2014 年 6 月、阿部「療養所の外へ、島の外へ―キリスト教霊交会創設者の墓前礼拝」同前 No.219、2014 年 8 月、を参照）。

[29] 逝去時とその後の青木をめぐる動向はべつに執筆する予定。

る不遇をかこつ愚痴が次第にふえた。」。かくある青木について、「愛楽園開設後の著者〔青木〕の「余生」について、人は冷淡な批評をすべきでない。」(渡辺信夫「解題」青木恵哉著、渡辺編『選ばれた島』新教出版社、1972 年)。わたしには、引用した箇所の第 1 と第 2 とが、ちぐはぐにみえます。「人は冷淡な批評をすべきでない」との抑制を指示しておきながら、自分は「不遇をかこつ愚痴が次第にふえた。」ととらえてみせたのですから。

亡くなる半年あまりまえに青木は、沖縄愛楽園内で編集された機関誌『愛楽』第 32 号(沖縄愛楽園入園者自治会編集、沖縄ハンセン氏病予防協会発行、1968 年 7 月)に句を寄せています(「俳句/矢野野暮選」)。一席に選ばれた 3 句が、「菜の花や盲爆被爆の傷の痕/非戦デモ都心ゆさぶり山笑う/核抱く平和のたうち下萌ゆる」です。「青木恵哉師追悼集」を組んだ同誌第 33 号(1969 年 9 月)に載る「遺詠十句」に、さきの第 2 句が入っていません。同人の「遺詠」は「越えて来て骨を埋むる一葉かな」だといいます(「編集後記」前掲『愛楽』第 33 号)。その遺詠 1 句の文言をあてた『青木恵哉遺句集 一葉(ひとは)』(1971 年)にも、さきの第 1 句「菜の花や」だけが収載されていません。『選ばれた島』(1972 年版)の編者渡辺による同書巻末ちかくの「編者あとがき」で、「最後に俳人としてすぐれていた著者〔青木〕の句をいくつか紹介しておこうと思います。」と選ばれた全 4 句にも、さきの一席全 3 句がありません [30]。

一席の選にあたった句が、しかも青木が現状のこの世を詠んだ句であるそれらが、その後、蔑ろにされているとみえてしまいます。青木自身が嫌ったのか避けたのか、わかりません。とはいえ、最晩年といってよい時期に、沖縄で「菜の花や盲爆被爆の傷の痕」「非戦デモ都心ゆさぶり山笑う」と詠んだ青木を、「疎外された老人」と切ってしまう所為こそが「冷淡な批評」ではないでしょうか。この句をふまえれば、70 歳台の青木を相応に老いたといえても、老いさらばえたと評することはできないでしょう。

青木は、すでに 1968 年 1 月の時点で、「高血圧のために入室静養中とのこと」と報じられていますし(「青木師入室」『らい園教会新聞』第 20 号、1978 年 4 月 6 日)、7 月の報でも「今尚入院静養中」(「青木師なお静養中」同前第 21 号、1978 年 7 月 23 日)というのですから、青木は一席入選の句が載る逐次刊行物『愛楽』を「静養中」の床で手にしたことで

30) 青木の句が書名に用いられた例があるも(文集編集委員会編『痛み経て真珠となりし貝の春―「愛楽園に集う会」記念文集』『痛み経て真珠となりし貝の春』「愛楽園に集う会」事務局、1994 年)、やはりさきの一席全 3 句はかえりみられにくいようすがある。

しょう。この句は、晩年に床に臥せながらもその気概をあらわしているだけではなく、選者を動かし、逐次刊行物の編集者をも動かしたその跡として冊子に掲載されたのです。これをもってして、青木を「疎外された老人」とする誹りを否定できるはずです。

わたしたちはまだまだ、青木恵哉にかかる文字に写真に、その軌跡に目を凝らして、じっくりと同人についての考え方を手探る必要があります。

さて、青木自身は、みずからをどうとらえていたのでしょうか？ それを、青木が「著者」なるものである『選ばれた島』の記述にみましょう。

沖縄に来たてのころ、「私」は本部半島の渡久地にある旅館で宿泊拒否にあいます。そのときのようすが『選ばれた島』に記されています――「当時すでに私の手は脱肉して少し指も曲がり、顔面神経もまた一部犯されて口辺が引きつっていた。それでも、旅行中病気を看破されてそのために困ったことは一度もなかった。ところが本部旅館ではあの始末だったのである。」（55-59）。その理由を青木は、「沖縄の人々が癩の症状にくわしく、且つこれを嫌うこと熊本で聞いた以上である」からだとみたのです。その当否はともかくも、青木はみずからの「症状」（後遺症）を知りながらも、それを理由とした拒絶にあうとはおもっていなかった節があります（ただし、里帰りのときの危惧は異なる。これについてはべつに論じる予定）。

こうした「著者」の自己認識は、『選ばれた島』の記述における人称代名詞にもあらわれています。「私」「私達」との主語が同書にはみえるその一方で、「病友」「病友たち」とそれらとが使い分けられているようすをとらえることができます。「病友」や「病友たち」がいるところで、すんなりと「私達」という一人称複数の人称代名詞が用いられないばあいがあるのです。これはなにを意味しているでしょうか――それは、青木という「著者」をめぐって、「病友たち」とのあいだに、あるときには、同質性が欠落していることのあらわれでもあります[31]。

では、『選ばれた島』の「著者」であるという青木は、自己認識においても病友からの見立てにおいても孤高のひとだったのでしょうか。たしかに、青木ほどの距離を移動したり、それほどの人びとと面談-対話したりしたハンセン病者はいないかもしれません。しかし、

31） 『選ばれた島』の記述における人称代名詞の考察は、阿部「私と私達と彼等―ハンセン病療養者の著述『選ばれた島』を読む」Working Paper Series No.225、2015 年 4 月、を参照。

距離のていどを問わなければ、それこそ、青木を洗礼へと導く大島の霊交会の創設信徒のひとり三宅官之治は、生まれ育った岡山から熊本の回春病院に入り、そこから高松の療養所へ移り、そしてその遺骨は郷里の岡山へ帰りました。三宅も、そこそこの、移動を遂げた病者といえます。

また、沖縄からの青木の里帰りにはパスポートが必要でした。これも稀有な体験といえるでしょう。しかし、予防法下でパスポートを取得して移動したハンセンをめぐる療養所在園者は、青木ひとりではありませんでした[32)]。

青木恵哉はハンセン病者として、もっともよく歩き、ひとに会い、ひとと話したひとりだといえるでしょう。くわえて、沖縄での救癩の先駆者、沖縄におけるハンセン病をめぐる療養所の礎を築いた、と讃えられもします。このように青木を囲む言論情況があると、いきおい、同人は稀有な、特別な、孤高のひとと仰望されてしまいます。けれども、そうした生を生きた、暮らしたハンセン病者は、その深浅や濃淡や鋭鈍や軽重をひとまずおくと、けして、青木ひとりではなかったのです。

沖縄の救癩伝道ということでいえば、記念館の青木展で示されているとおり、青木の先達として米原馨児、岸名信若、荒砥琢哉、乙部勘治たちがいます。救癩伝道を担ったハンセン病者もまた青木にかぎられず、さきの岸名、徳田祐弼、そして青木とともに済井出での土地購入に尽力した大城平永がいます。こうした人びとを忘却したり無視してしまったりしてかえりみないところに、ハンセン病史問題があります。

わたしはつい最近、救癩と伝道に従事した中条英一というハンセン病者を知りました[33)]。エダ・ライトからハンセン病者を救うよう告げられた中条は、回春病院を軽快退院したのちに「本妙寺周辺に移り住」み、そこでいわゆる「患者狩り込み」にあって草津の栗生楽泉園に送られたのです。

そうした人びとの軌跡を歴史のなかにきちんと位置づけることが、歴史学研究者や歴史家のつとめだと、わたしはとらえています。

---

32) 大島青松園での事例を参照せよ（阿部『大島ユリイカ―ハンセン病をめぐる国立療養所大島青松園の歴史表象』滋賀大学経済学部、2019 年、Ⅱ01「盲導鈴」）

33) 「愛と奉仕の日々―リデル、ライトの足跡」7『熊本日日新聞』1993 年 3 月 30 日朝刊（記事署名なし）、リデル、ライト両女史顕彰会編『愛と奉仕の日々―リデル、ライトの足跡』リデル、ライト両女史顕彰会、1995 年。講演会終了直後から同人についての情報が寄せられたので、いずれべつに同人をとりあげる予定。

ありがとうございました。

謝 辞　リデル、ノット、ライト顕彰会長、同会事務局長、リデル、ライト両女史記念館長、同館員、日本聖公会沖縄教区事務所のみなさまにお礼をもうしあげます。ありがとうございました。

附 記　本稿の見解の責はすべて執筆者阿部安成にある。